Voice ヴォイス 第5号

大分県立芸術文化短期大学　サービスラーニング公式新聞

第5号／発行2011年3月17日

芸文短大生“発”地域活動フォーラム2010開催

大分県立芸術文化短期大学の学生が参加している様々な分野のサービスラーニング(社会貢献学習)。その成果を対外的に発表する「地域活動フォーラム２０１０」が２月１日、大分市コンパルホールにて行われた。報告は、「ＳＡＥＭＯＮ２３」「日韓次世代映画祭」「上野の森アートフェスティバル」など計9プロジェクト。学生たちは、動画やパワーポイントなどをうまく用いて、緊張しながらも生き生きと発表した。その他に、情報コミュニケーション学科の社会学担当教員２名の報告も行われた。報告後、特定非営利活動法人 大分特別支援教育室フリーリー理事長の梶原陽子氏をはじめ計６人の方々が総評。高い評価が多かった半面、活動自体の様子だけを報告した発表に対して「もう少し自分の考えや思いを話してもいいのでは」という意見も寄せられた。来年の「地域活動フォーラム」では今回の反省点を踏まえて挑みたい。

written by　笠村　絢（情報コミュニケーション学科・１年）

ナラティブ能力育成プログラム担当教員挨拶

「地域活動で体験したことを、体験だけで終わらせない」。

情報コミュニケーション学科　吉良 伸一 教授

「地域活動で体験したことを、体験だけで終わらせない」。初めに吉良伸一教授は、情報コミュニケーション学科が精力的に取り組んでいる「サービスラーニング」と「ナラティブ能力育成」についての具体的な説明をした。きっかけは平成５年に、地域に貢献する人材の育成を目的にした「地域社会特講」。平成２０年からは「情報発信特講」も開始された。これらは、地域で活躍する方々へ招きお話をして頂く講義だ。そこで紹介して下さった地域活動に学生が参加することで、学科教育と地域活動を結びつけ地域の改善を図り、学生自身の能力を高め生きる力を養っていく取り組みが始まった。これが「サービスラーニング」である。新聞や動画配信などを通じ、自分自身の物語を体験するだけではなく、体験を語り発信する。これまで参加してきた学生たちは、実際に力をつけて学校や職場、地域で活躍するようになっているそうだ。今後もより学生の成長を期待したい。

written by　佐田 伊都美（情報コミュニケーション学科・１年）

サービスラーニング発祥の地 アメリカ視察報告

「アメリカの方法論を日本的・芸短的な文脈で活かす」。

情報コミュニケーション学科　高橋 雅也 講師

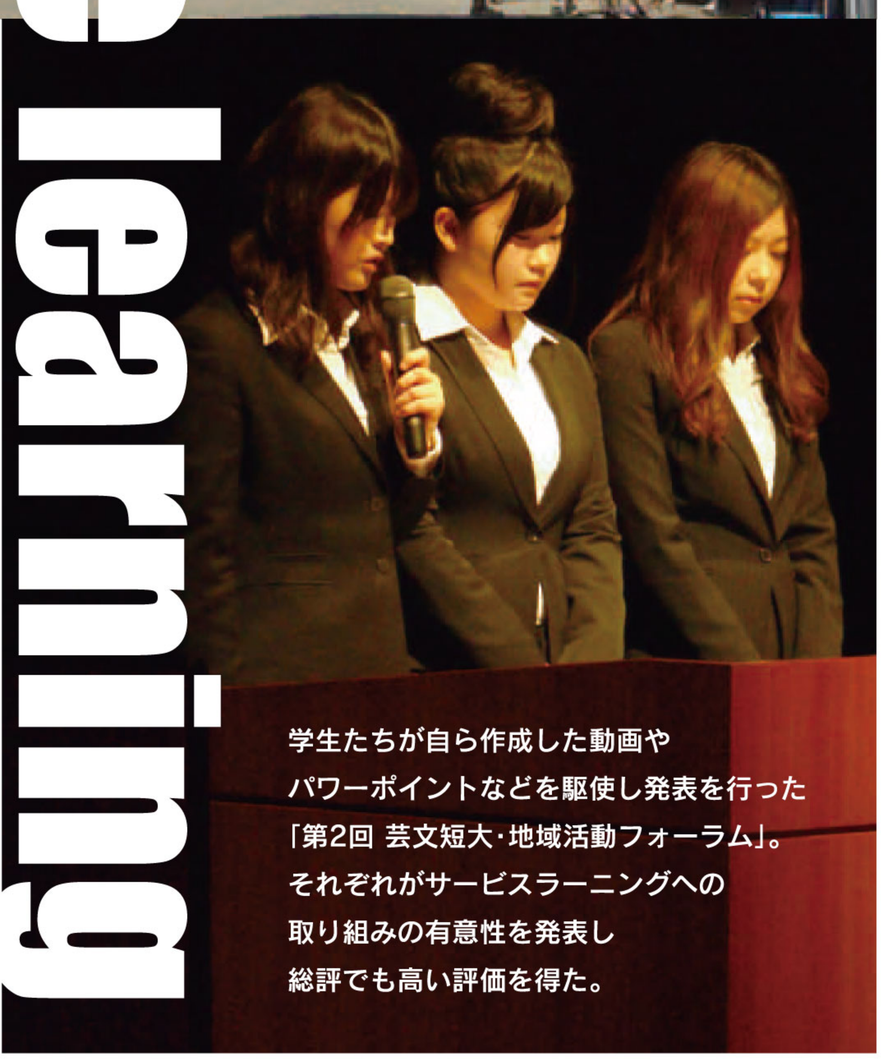
昨年の2月22日から3日間、米国カリフォルニア州にノートルダム・ド・ナミュール大学、ドミニカン大学、キャンパスコンパクト州事務局を訪ね、サービスラーニングの取り組み視察を行った。ノートルダム大学ではインナーシティで貧困の実態調査を行う活動や、ドミニカン大学では地域の古老からオーラルヒストリーを聞く活動など、豊富な体験メニューが揃っていた。また、体験のリフレクション(振り返り)を通して、格差や民族問題について真剣に議論したことがきっかけで、自分の進路を決めたと語る卒業生に会うこともできた。さらに、実施体制に関して、教員・学生・コミュニティパートナーの相互評価による改善のしくみについても学んだ。州事務局では、コーディネータたちの苦労話を伺い、スタッフの連携の大切さを確認できた。米国には社会正義としてサービスラーニングを行う思想的な背景があるため、日本的・芸短的な文脈でその方法論を活かす道を模索する必要があると語った。

written by　上尾 美咲紀（情報コミュニケーション学科・１年）

第2回 芸文短大・地域活動フォーラム

サービスラーニングまっしぐら！
参加学生が報告する、地域活動厳選9本

Service learning



学生たちが自ら作成した動画や
パワーポイントなどを駆使し発表を行った
「第2回 芸文短大・地域活動フォーラム」。
それぞれがサービスラーニングへの
取り組みの有意性を発表し
総評でも高い評価を得た。

report.1

あしなが育英会

reported by 武南 愛（情報コミュニケーション学科・2年）

あしなが育英会は、親を亡くしたり、怪我や病気で働くことが困難になった家庭への奨学金制度や、遺児達の心のケアを大事にした民間非営利団体だ。

あしなが育英会の活動内容は、主に３つある。１つ目の街頭募金は、芸短生が最も多く参加する活動だ。春に４日間、秋に４日間と年に８日間、トキハ本店前を拠点に大分駅前やセントポルタ中央町などに分かれて活動していると話して下さった。この募金で集められた寄付金の全額をあしなが育英会に寄付し遺児たちに奨学金として渡される。

２つ目のPウォークは、国内外の遺児達と一緒に歩きつつ交流を図る活動で、３つ目のつどいは、宿泊研修で遺児達が将来の不安などを吐き出せる場である。他にもいろんな形で世間に主張できる場をつくって活動を行っている。

written by 坪田 真紗子（情報コミュニケーション学科・1年）

report.2

府内学生ECOフェスタ

reported by 赤池 すずか（情報コミュニケーション学科・2年）

市内の環境イベントにおける「市民参加」の不在を感じたことがきっかけとなりスタートした、府内学生ECOフェスタ。市民参加をどれだけ実現できるか。学生中心の運営は試行錯誤だったという。

当日はどのイベントも大盛況で、中でも世界一小さな花火大会では予想をはるかに超えた参加者が集まり、とても嬉しかったそうだ。また約三千個のろうそくによるキャンドルナイトでは、普段とは違う府内町の雰囲気を市民の方々と分かち合った。

第一回目だったが予想以上に盛り上がったという。反省点も生かして、今後の大分の市民参加の場としてさらなる発展を期待しているそうだ。

written by 河野 鈴美（情報コミュニケーション学科・1年）

interview

大分特別支援教育室
フリーリー理事長

梶原 陽子 氏

「良かった点の発見」

「しっかり準備をしていることが窺えて大変素晴らしかった。形にするということは、目に見えない努力が必要であり、言葉で表せないものがよく伝わってきた。また、それぞれ着眼点が個性的で良い！背伸びし過ぎず、できることをやっていた点や、良かったところを発見していた点も良かった」と、どの発表も悪いところは一つもないと高評価を受けた。最後に「失敗を恐れてしまう反省点よりも、良かった面を発見することが大切だと思う。そうすれば人や社会の良さも発見できるようになる。失敗を恐れず、自分の好きなように生きて欲しい」とアドバイス頂いた。

written by 宮崎 ありさ（情報コミュニケーション学科・1年）

interview

鶴崎商工青年部

工藤 正浩 氏

「汗をかいて行動する大切さ」

「積極的に多方面で活動していて驚いた」工藤さんは開口一番にそう言った。SAEMON23の発表を聞いて「どの部門も最後までポイントをよく捉えていた。写真がスライドにされていたので当日の学生、お客さんの様子がわかったのでよかった」と述べた。竹田の食育ツーリズム研修では、「今回の発表の中で一番興味を持った。経験してみたいと思った。この活動は学生だけではなく、子ども達にもさせるべきだ」と語った。最後に「サービスラーニングは素晴らしい活動なのでもっとPRしたほうがいい」と話して下さった。私たちの活動は、自分が成長できると同時に地域の特徴や抱えている問題をみんなに知ってもらうことができる。PR活動が今後の課題だ。

written by 天本 聖菜（情報コミュニケーション学科・1年）

interview

竹田市国産原材料
供給・利用協議会

佐藤 知博 氏

「失敗して学ぶ、そして楽しむ！」

「多くの学生が積極的に活動していて良い印象を受けた」という。発表に関しては、「活動に参加したきっかけを付け加え、全体的に細かく数値化し、発表に抑揚をつけて演出するともっといいものになる」とアドバイスを頂いた。「サービスラーニングできっかけを貰った学生が、次は外の人へ興味をもってもらうきっかけとなっていってほしい。また、自信のあるものこそ、共有して同じ経験をした集まりを通して、更に広げていくことが出来る」と語って下さった。「学びはさせられるのではなく、やってみて自分たちが失敗していくことで学びになる。どんどん失敗していいから、学生しかできないことを、とにかくはっちゃけて、めちゃめちゃ楽しんで！」と笑顔で話して下さった。

written by 中原 聡乃（情報コミュニケーション学科・1年）

report.3

竹田食育ツーリズム研修

reported by 谷口 未樹、西 由紀子（情報コミュニケーション学科・２年）

７月に竹田で農家民泊が行われた。２、３人のグループに分かれて宿泊し、饅頭作りや竹細工などさまざまな農家体験をした。また２日目にはとうきび早朝収穫体験をし、とうきびフェスタのイベントスタッフとして参加した。これらの活動を通し、竹田市の魅力を情報発信しようと考え、竹田市と芸文短大、宿泊客の相互間のやりとりができるものを目的としたホームページ「たけたみつけた。」が作成された。

１１月と１２月には竹田市の方を講師に招き、郷土料理を習ったり、お話を聞いたりすることで、スローライフをすすめるスローライフ講座が行われた。スローライフ講座では、味噌玉作り体験やとうもろこしを使った郷土料理体験などを教わった。

私は今回発表を聞いて、地域の方々と交流することで日常生活ではできない貴重な体験ができることを知った。

written by 河野 莉未（情報コミュニケーション学科・１年）

report.5

大分七夕まつり

reported by 笠村 絢、中原 聡乃、宮崎 ありさ（情報コミュニケーション学科・１年）

８月６日(金)から８月８日(日)までの３日間、大分市街地で開催された大分七夕まつり。本学からも約８０名の学生が７日(土)に行われた七夕ブロードウェイに参加した。

当日は朝１０時に城址公園に集合し、例年通りバルーンリリースのための風船作りの手伝いや、最終打ち合わせと準備を進めた。今年初の企画である特設ステージ付近では、かき氷や輪投げなど、子どもたちが楽しめる模擬店を出店し、会場を盛り上げた。また、バルーンリリースも風船が夜空に向かって飛んでいく様子がとても感動的で、今年の七夕まつりも大成功に終わった。

written by 佐藤 早紀（情報コミュニケーション学科・１年）

report.7

環境活動

上野の森の会

reported by 小田 麻衣子（国際文化学科・２年）
佐藤 維花（情報コミュニケーション学科・２年）

キャンドルナイト

reported by 楠本 愛（国際文化学科・２年）
荒木 夏穂（情報コミュニケーション学科・２年）

上野の森アートフェスティバル

reported by 相馬 志織、秋月 愛奈（情報コミュニケーション学科・１年）

環境活動では、上野の森の会、キャンドルナイト、上野の森アートフェスティバルについて紹介された。

上野の森の会の活動では、地域の人と協力して苗木を植えている。「森で見つけた植物の名前も教えてくれる」と活動の楽しさを伝えた。また、芸文短大で行われたキャンドルナイトは、竹田のライトアップ「竹楽」の竹灯篭を使用しているそうだ。「キャンドルナイトの認知率が低いので、さらに多くの人に知らせていきたい」と語った。最後に、上野の森で行われたアートフェスティバルについて報告され、芸文短大生が子どもたちと一緒にエコバッグを作ったことが写真を交えて紹介された。

フリーリーの梶原陽子さんは発表後、「身近な活動で参加しやすくコミュニケーションの場になっている」と、これらの活動を評価していた。

来年度も多くの学生が参加することを期待したい。

written by 井原 遥香（情報コミュニケーション学科・１年）

report.4

SAEMON23

reported by
成松 美由紀（2年）、稗田 結菜（1年）、佐田 伊都美（1年）、上尾 美咲紀（1年）（4人とも情報コミュニケーション学科）

SAEMON２３は加藤清正公を祀る法心寺の二十三夜から始まった。この祭りでは、①ECOステーション(祭会場のゴミ拾い・祭の広報・宣伝・Tシャツ作り)、②ワークスペース(うちわ作り・模擬店)、③ダンス(鶴崎踊りをアレンジした振り付けの考案・Tシャツのデザイン作成)の３部門に分かれた。発表者はどの部門もみんなで意見を出し合い作り上げ、やり遂げたという達成感を感じることが出来たと述べていた。そんな中でもやはりそれぞれの部門ごとに反省点がでたようだ。①ゴミ回収時の場所や分別の分かりにくさ、ゴミ袋の不足、②いす不足、③練習期間の短さによる練習不足などが挙げられた。この反省点を生かし、発表者はサークルにして引き継ぎが円滑に進むようにすることを提案し、一年間という期間の中でより良いものを作り上げようという結論に至った。長い期間を通して交流することで、鶴崎の人達との絆もより深めることも出来ると述べていた。

written by 丸野 由貴（情報コミュニケーション学科・１年）

report.6

長湯温泉♨日韓短編映画祭

reported by 森本 絵美莉、吉弘 梓（情報コミュニケーション学科・２年）

この映画祭は昨年の１１月１２日～１４日の３日間にかけて、竹田市長湯温泉で行われた。芸文短大生が中心となって開催し、約５０人のスタッフと地元・NPO団体の協力で成り立っている。チケットは全国から韓流ファンが殺到し、約３時間で完売するという人気ぶりを見せた。

今回の活動を通して良かった点として、地域活性化に繋がったこと、スタッフ自身の成長が出来たことを、悪かった点として、スタッフ間のコミュニケーションがとれなかったこと、臨機応変に動けなかったことを挙げた。写真や動画を交え、楽しさが伝わってくる発表だった。

written by 木許 麻衣（情報コミュニケーション学科・１年）

interview

(有)オーシャン企画

堀米 京子 氏

「若い原動力から生み出す地域活性化」

「学生達の力を活かし、地域の活性化を図るという活動は社会に出るとなかなか難しいものだ。ナラティブという"自分自身の物語"から課題を見つけ、その統一したキーワードから人と人とのコミュニケーションを広げてゆく。それはやり甲斐や幸せ、今まで知らなかった自分の一面を見出だすきっかけにも繋がる」と語る。また、「"何のためにそのような活動をするのか"という意識を個々が持ち、物事の終始の流れや裏付けをより明確化して活動に取り組むことで、サービスラーニングの活動はさらによいものになると思う」と助言して頂いた。すべて物事には意味があり、その裏付けを理解する力は社会に出てからも大切なことなのだと思った。

written by 佐藤 由樹（情報コミュニケーション学科・１年）

interview

天瀬グリーンツーリズム研究会
会長

松浦 吐四郎 氏

「芸短大生の活動力は力強い！」

松浦さんは、今回の地域活動フォーラムを通して、改めてナラティブやサービスラーニングの意味を理解したそうだ。また、七夕まつりの発表を聴いたときは、「自分が２５年前にボランティアでお祭りの風船を膨らましたことを思い出して嬉しかった」と目を輝かせて語った。

芸文短大生の活動力は凄い！と感心された一方で、なぜその活動を選んだのかをもう少し明確に知りたかったという。「今後は与えられたものだけに参加するのではなく、自分から興味を持ち、活動してみたいことをどんどん提案していったらよいのではないか」とご指摘いただいた。

written by 大谷 蘭子（情報コミュニケーション学科・１年）

interview

大分青年会議所

三宮 康司 氏

「発表のまとまりは大切。きっかけも大切。」

「全体的にきれいにまとめて発表できていた」と三宮さんは語る。中でも竹田食育ツーリズム研修の発表については「過疎地域での新しい考え方、見方を取り入れた情報発信というのは印象的だった」とのこと。しかし、「今回のフォーラムは発表のきっかけはどこにあるのか、その後どうつなげていくのかの説明が足りなかった」と問題点を指摘。「１つの事柄を端的に発表し、起承転結に気をつけると良くなる」と今後のアドバイスを頂いた。このような学生発表に関しては「自分が感じたことを人に伝えるにはどう展開していくのがよいか、どう理解してもらおうかを考える場所が学生生活にあるのはすごく大事」と芸短の取り組みを高く評価しているようだった。

written by 太田 有里紗（情報コミュニケーション学科・１年）

佐賀関地域発見サイクリング

11月6日に行われた佐賀関地域発見サイクリング。佐賀関の魅力を掘り起こす事と自転車のマナー啓発を目的とした大分市主催のイベントだ。

参加者は大分駅に集合の後、サイクルトレインに乗り幸崎駅へ(幸崎駅からの合流も可能)。降車後、サイクリングが始まる。日本鉱業佐賀関鉄道の廃線になった跡地を走り、道の駅さがのせきを通って佐賀関市民センターへ行き、折り返し幸崎駅へと戻ってくるルートだ。

本学の学生も多数参加し、列車の中ではサイクリングのマナーについてのクイズ大会や替え歌を企画し、現地では一緒にサイクリングをしたり、チェックポイントでの物品の配布に取り組んだ。サイクリング途中、地域の方からゆでもちとカボス、クロメたこやきを頂いたり、市民センターでは同日行われていた佐賀関ふるさとまつりの郷土料理や海の幸を味わったりすることも出来た。

この日はウォーキングのイベントもあり、相乗効果により参加者へ佐賀関の魅力をより伝えられたのではないだろうか。

written by 岩尾 聖那（情報コミュニケーション学科・１年）

平成22年度 地域社会特講リスト

4月20日　Ｒｅ空間　代表　堀米 京子氏
「スローライフと再生のまちづくり」

4月27日　大分青年会議所　理事長　三宮 康司氏
「青年会議所とまちづくり」

5月11日　大分トリニータ　監督　皇甫 官氏
「地域に根差す大分トリニータ」

5月18日　鶴崎商工青年部　部長　松井 和美氏
「鶴崎のまちづくりと鶴崎サエモン二十三夜祭」

5月25日　大分市都市計画部都市交通対策課自転車総合対策担当班
「自転車の似合うまちづくりバイシクル・フレンドリー・タウン・おおいたの取り組みについて」

6月1日　おおいた上野の森の会　事務局長　池松 信子氏
「上野の森を守り育てる」

6月8日　前　滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長
現　京都橘大学教授　上原 惠美氏
「地方で文化の仕事に関わって」

6月15日　大分市役所環境対策課環境保全係　三ノ宮 耕介氏
府内五番街振興組合副理事長　林田 文夫氏
「府内学生ｅｃｏフェスタについて」

6月22日　おおいた子ども劇場　村上 規子氏
「もっとゆとりを、もっと遊びを、もっともっと文化と芸術を」

6月29日　BEPPU PROJECT　プロジェクトマネージャー　林 曉甫氏
「別府プロジェクトとは何か」

7月6日　大分市美術館　館長　菅 章氏
「現代の美術館と地域」

7月13日　アートスタジアムオフィス　代表　佐藤 知博氏
「竹田食育ツーリズムとは」

7月20日　車イスマラソン選手　有屋田　智香氏
「車イスマラソンを100倍楽しむ方法 ～女性でも楽しむ方法を教えます～」

9月28日　フリースペースフリーリー　コーディネイター　梶原 陽子氏
「発達障害・学習障害とフリースクール・フリーリーの活動」

10月5日　季の風経営　社会福祉法人すぎのこ村元理事　松浦 吐四郎氏
「知的障害とすぎのこ村」

10月12日　えばの会　副理事長　二宮 孝富氏
「女性の人権～女性に対する暴力の撤廃へむけて～」

10月19日　深見 憲　氏
「自閉症(広汎性発達障害)、地域、コミュニケーション」

10月26日　大分市福祉保健部福祉事務所
長寿福祉課権利擁護担当班主任　植田 卓士氏
「認知症サポーター養成講座」

11月2日　臨床心理士　長谷川 美枝子氏
「障がい児と家族～親の立場から～」

11月9日　住想　代表　行野 富男氏
「環境と住宅について考える」

11月30日　人形劇ボランティア　福原 順子氏
「子どもとのコミュニケーション～人形劇の世界～」

12月7日　九州アフリカ・ライオン・サファリ株式会社　獣医師　神田 岳委氏
「動物と人間のコミュニケーション～言葉でない言葉～」

12月14日　九州自然エネルギー推進ネットワーク　小坂 正則氏
「自然エネルギーの利用とその推進」

…前期　…後期

芸短創作劇　ラファエロ ～ルネッサンスの彗星～

大分市にあるｉｉｃｈｉｋｏ音の泉ホールで１２月１９日、「芸短フェスタ２０１０」の一環として、芸短大生による創作劇「ラファエロ～ルネッサンスの彗星～」が上演された。原作は里中満智子作の「ラファエロ　その愛」で、共通科目「創作表現」を受講している本学４学科と専攻科の学生120名が取り組んだ。

創作劇の上演は今年で４回目。「嵐が丘」「ロミオとジュリエット」「アマデウス」に続いて、今回は３７歳という短い生涯を生きた画家・ラファエロの一生を描く舞台に挑んだ。

本編の登場人物以外に、幕間にルフィやナルトなど多くのアニメキャラが解説者として登場。ストーリーを現代的に分かりやすく解説するという演出で、誰もが楽しめる舞台になったと思う。

written by 山下 裟世（情報コミュニケーション学科・１年）

Voice
ヴォイス

大分県立芸術文化短期大学 サービスラーニング公式新聞
〒870-0833　大分市上野丘東1番11号　大分県立芸術文化短期大学
tel.097-545-0542（代表）／fax.097-545-0543